
鬼の守る山

夏実 歓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の守る山

【Nコード】

N3826D

【作者名】

夏実 歓

【あらすじ】

地霊小人から聞いたさすらい人に会うために旅をしている謎の少女。彼女はついに尋ね人の閉じ込められている五つ峰の山にたどり着く。彼女はさすらい人に会えるのだろうか？また、彼女はいったい何ものなのか？ファンタジーエンの昔の話・・・

第一章（前書き）

この物語はミヒヤエル・エンデのネバーエンディングストーリー及びそのシェアザワールドのレジェンドオブファンタージェンの二次創作です。

苦手な方は大目に見てください。

また原作を読んだ事が無い方は一度読んでみてください。面白いですよ。

第一章

これは、ある地霊小人が聞いた話で、今からはるか昔の事だそう
だ。囚われになった古いさすらい人の話である。私は、この世界に
入った人の子の話を知っていたから、さすらい人の話にもとても興
味があつた。そいつは、この世界の東方の五つ峰の山に閉じ込めら
れていたという話だが、今もいるのかどうかわからない。ほかに
詳しい話も無い。第一この世界では東とか西とか遠いとか近いとか
そんな事はあまり関係がないともいえる。

ただ、一つ確かな事は、私が今旅をしていて、その彼に会いたい
という事だけだ。

そのために、ガラスの山からレオン人の住む砂漠を抜けて火の山を
越え草海原に行くこと一月、岩喰い男の食べ粕山に入り、暖か湖^{あたたこ}
ある五つ峰の山にたどり着いた。その山の大きい事大きい事、まる
で天を突き刺すがごとくに聳え立ち常に山の東か西が夜であり、こ
れの頂きに登るのは足のあるものには無理であつて、羽のある者も
登つたが最後、あまりの高さに恐れをなして飛ぶ事ができなくなる、
つまり帰れなくなってしまうのだ。

ただ、たまに誰にも邪魔される事の無い眠りを求め、幸い^{さいわ}の竜が
東から二番目の峰の頂きに降りてくるという話だが、それも、20
0年に一度くらいである。

そんな調子であるからこの山にはほとんど生き物が住んではいな
い。この山を越える方法は一つきりで中央の峰とその西側の峰の間
（そこに暖か湖があるのだが）の広い谷間を抜けて行くしかない。
そこだけは、急な石段で作られた道が続いており三人の山守がこっ
そり暮らしている。そして今、私がいるのはその広い谷間、湖のほ
とりの不思議な建物である。中は存外広くちよつと大きな集会所と
いったところで、その一番奥の壁の真中に大きな札が一枚貼ってあ

った。まるで刷り込んだようにぴつたりと貼ってあってとてもはがれそうに無いそれには、「公主命五山封」と記されており、その横には鉄の豆球がいつぱい入った壺が置かれ、一見何かの祭壇の様にも見えた。

第二章

ついさっきまでは昼間のようだったのに外はもう暗くなっていた。何故なら日はとうに真上を過ぎていたからだ。この山では昼の時間は普通の半分で夜の時間は変わらず夜なのだ。そして、西つまり日の沈む側から登った私はお日様と行き違ったのだから、長い夜を過ごさなければならない。それは上り始めて三日目の私にはよくわかったことだ。だからここで、いったん夜を過ごそうと決めたのだ。

そうして、日がすっかり落ちる頃には寝る支度も整えて長い夜をいかに過ごそうかと思案していると、かすかな足音とぼそぼそしゃべる声が聞こえてきた。

「いや、久しぶりに三人揃ったね」

「ねえねえねえ、今夜は俺は留守番してたいよ」

「駄目駄目、あいつの餌は重いんだから変わりばんこに運ばなくっちゃ、とても朝までにはつけないもの」

「そんなことって、結局は誰か一人は何もしないで済んでるんだからついてくのは退屈さ」

「三人一緒にやる仕事さ！　そういう約束でやってきたのにおまえはいつもそんなこと言うなあ」

「でもさ、留守番も仕事だと思うよ、俺は」

「僕はそうは思わない留守番なんて待ってるだけで、仕事だなんていえないよ」

「どちらにしても、私達は三人一緒にこの仕事はやりなさいっていわれてる。だから三人でやるべき仕事それが定めさ」

するとだんだん、ぼそぼそ声は大きくなって、足音はこそこそからどたとたに変わってきた。彼らの声は言葉は丁寧だけれどもまるで轟々燃える焰のような声だった。やがてどたとた足音がドスンドスンに変わりびたつと止まった。

「あれあれあれ、誰か調理小屋に上がってるみたいだよ」

「ふんふん、確かに確かに誰かいる」

「珍しいけど、困ったな、これから料理の準備なのにな」

「なんとかいって、少しの間、外にいてももらえないかな」

「そうだな、少しの間出てもらわないとたぶん火傷をしちゃうだろうから」

「じゃあ、俺が言ってくるよ三人でいっても驚かせちゃうだろうから」

「そうだね、まかせたよ」

「私もまかせた」

そして、言い終わるが早いか、戸口のほうにぬっと大きな毛むくじやらの青黒い手が現れて、

「旅の方、旅の方、入りますよ」

と一言いって入ってきた。私はその姿を見て飛び起きてしまった。

そいつは、青い肌に、まるで針金みたいな毛を生やし、大きな口には狼みたいな歯が並んで目は鬼火のよう、頭には野牛のような二本の角が生えていた。体格はがっちりしていて平原地方の緋緘野牛くらいはあり、手には大きな大きな石のしゃもじを持っていた。

「なんだ、なんだ、旅の方、起きていらしたんなら返事くらいしてもいいじゃないですか！　まあ、起きていたなら話は早い。少々気の毒ですが、ここはちよつとこれから用事で使うので外に出ててもらえませんか？」

私があまりの恐ろしさにがたがた震えて声も出ないでいると、その鬼火のような目玉がギョロリと動いてこちらを見る。

「聞こえてないんですか！返事は大切ですよ・・・うっむ、耳が聞こえてないのかな？」

そして大きく息を吸い込むとまるで角笛のような声で

「すゝいゝまゝせゝんゝ！！よゝうゝじゝでゝこゝをゝつゝかゝうゝのでえ・・・」

空気が破裂したようになった。すつと意識が遠のく一瞬天井が見え

たかと思つと目の前が真つ暗になった。

第三章

突然、私はものすごい熱気に目を覚ました。

「あ、お気づきですか？」

横にはさっきの青い奴がいて、私が小屋の外にいた。どうやら気絶していたらしい私を外に運び出したみたいだった。

「突然倒れるんだから、びっくりしますよ。ねえ、倒れる時は一言いってくださいな」

そういいながら、一足こちらに近づく。まるで、刺すような熱気がぐわっと押し寄せてくる。驚いて私が後ろに飛びのくと。

「ああ、なるほど、怖がらなくてもいいですよ。別にとって喰いはしませんから」

幾分落ち着いた表情でそういうとドツカリその場に腰を下ろした。

その段になってようやく私も落ち着いてきた。

「すいませんが、小屋の中には入らないでください」

私の様子を見ながら、その青鬼は穏かに言った。声は燃え盛る焰のようだったが、そこから穏やかさが感じられた。

「どうして入れないんです？」

私はおずおずと聞いた。

「ちよつとね、俺達が料理をしたんでね。鬼火族でもない限りえらい事になってしまふんですよ、熱くつてね。ほら、今の俺の体もすぐく熱いから近づくのも辛いでしょ？」

そう言われて、はたとさっきの熱気に気付いた。よく見てみれば鬼は口から煙を噴いて体からは蒸気が立ち上っている。

「だから冷めるまで待つて下さいね。俺は湖で体を冷やしてくるか」

そう言つて、鬼はズシンズシンと湖のほうに向かっていった。

その跡には、真っ赤に足跡が残されていてどれだけ彼が熱かったのかがよくわかった。それから、遠くのほうからジュワ とすごい音

がして蒸気の柱が立ち上った。

「すごいなあ」

と、私はただなんとなく感心してしまった。暫くすると、また、ズシンズシンと足音を立てながら青鬼が帰ってきた。今度はさっきより幾分軽やかな足取りで機嫌も良さそうな雰囲気だった。

「どうです、旅の方？ だいぶ涼しくなっただでしょう」

鬼は言っでぐつとこちらに近づいてきた。近づかれるとその迫力はより一層増し鋭い爪やぐつぐつした手はその風貌をより恐ろしく見せたが、人懐っこい雰囲気も同時に伝わってきてそれほど怖くも思えなかった。彼の体もまだ熾きぐらいの熱は放っていたけれどそれがかえってやさしい暖かさだった。

「ええ、だいぶ」

そう私が答えると嬉しそうに、といつても傍から見たら人狼が舌なめずりしたかのようなうだが、微笑んだ。

「実はあんたには、感謝しなけりやならないんですよ、俺は。あんたのおかげでこうして仕事をサボって留守番できてるんですから」

「でも・・・」

私は一つ疑問が湧いた。

「そんなに、熱くなるなんてどんな料理なんですか？」

鬼はちよつと困った顔をして一瞬星空を見上げてから言った。

「なあに、炒り豆とスープですよ。ただ、鉄の豆と銅のスープなんですかね」

なんだか頭がくらくらした。

「そんな料理初めて聞きました！ それ、食べるんですか？ あなた達は」

そう私が聞くと、鬼はニヤニヤしながら言った。

「食べるとしたらどうするんです？」

「私、驚いちゃいます」

「でも、ファンタージェンには岩喰い男だっているし珍しくは無いでしょう」

「そうかもしれないけど、やっぱりはじめて聞く事だから驚きますよ」

「じゃあ、この料理を聞いて驚いたわけだ！」

「はい、だけど、あなた達がこの料理を食べるのならもつと驚きます」

その答えを聞いて鬼はゲラゲラ笑った。その笑い声はガラングランと大きな鈴を鳴らすように辺りに響き渡った。

私は今度は気絶しまいと耳を抑え鬼が笑い終わるのを待ったのだが、鬼はそんな私の姿を見てさらに声をあげてガラングランと激しく笑ったのでこちらは堪らなくなり、あらん限りの声で叫んだ

「何がそんなにおかしいんですか?!」

鬼はようやく笑うのをやめて、まだニヤニヤはしていたが、ふうつとひと息つくと

「いや、驚かせるのはもともと俺達の仕事の一つでしてね、最近ほとんど生き物には会わないし、ここ千年ほどは派遣の身で本業はお休みだったもんでうれしかったんでさあ」

「困った仕事ですね」

「いや、本当よそでは事情のわからん奴らには困った事みたいですがね、ここは住み心地がいいんです。こちらの親族もおりますし。

まあ、もつとも、そういうのに会いはいけないんですがね」

「なんで、よそでは困った事でこちらではそうではないんですか？

それに仲間に会えないって言うのはどういうことです？」

第四章

私はいつのまにか鬼との会話が楽しくなってきた。

「それはですね、一つは・・・さっき言いましたがね、俺達はよそ者でね、大王様から派遣されてきたんです。だからよその事も知っている。それが一つ」

「じゃあもう一つのほうは？」

「そっちは簡単！旅の方は俺の仕事にお気づきでない？」
いわれてはつと気付く

「あなた達は、話に聞いた山守さんか！」

ガランガランと、けど、私に氣を使ったのか、さっきよりは控えめに笑って

「そうですとも、俺達や山守です。だから山を離れる訳にはいかないのでさあ！」

と、その野牛のようにたくましい体を膨らませた。

「で・・・、食べるんですか？」

私はおずおずと聞く

「何をだい？」

はて、どうした話だったかしらと鬼は首をかしげた。私はなんとなく愉快になってニコニコしながら聞く

「鉄の豆と銅のスープですよ」

すると鬼は、ようやく思い出したのかしきりにうんうんとうなずいている。

「ああ、その事だったら俺達は喰わんですよ。あれはお勤めでね。それに俺達は火が通ってるものは喰う事は無いんです。何せ鬼ですからね」

「じゃあ、何でそんなものを作るんですか？」

「いや、それがお勤めで・・・」

彼は、なんとなく口を濁してごにごに言い出した。どうもあま

りいつちやあいけない事のようにうだった。しかし、そう思うとどうしても聞きたくなった。

「だからどんなお勤めでなんですか？ 教えてくださいよ」

うーん、うーんと鬼は考え込んでいた。ぶつぶつとなにやら独り言をつぶやいている。

「昔、地霊小人にあいつの事を話したときも怒られなかったし大丈夫かなあ・・・」

私は地霊小人という言葉聞いてこの山守は私の探し人を知っているのだと感じた。

これは是非、話を聞かなくては、そう思った。

「別に、誰かに話すわけではないですよ。それにその様子だとはつきり話すなといわれてる訳ではないんでしょ？」

「うーんでもなあ、本当はなるべく人目につけるなって言われてるんだ。出会ってしまったらしょうがないけど。だから、道も一つだけしか作らなかったのにな」

なんだかもう、聞いていない事までしゃべっている、どうやら押せばしゃべってくれそうな雰囲気だ。

「なんだ、なおの事大丈夫ですよ。私はその事を見たわけではないし聞こうとしてるだけだから。ささ、話して下さいな」

「でも、話すという事は望めば会えるってことかもしれないですよ、ここでは。だって、ここはファンタジーエンだもの。思いはどんな乗り物よりも優るのですから」

なかなか、どうして感の冴えた回答だ。だけどここであきらめる訳にはいかなそうだ。どうやら道なりに進んで会えるわけではなさそうだし、彼の言葉からいえば地霊小人からこの話を聞いた時点でどうしても会いたくなってここまでこれたのは私の思いが強かったからだ。

「大丈夫、大丈夫、そんな事望むはずがないでしょう。人が困る事を望むのは私の好むところではないですもの」

何ら説得力のない嘘だがとっさにこれしか出なかった。勢いでこま

かそうと私は続ける

「あなただって、ここまで話したんですもの。料理の事まで。きつとあなたも話したかったんですよ。さあさあ、話して下さいな。大丈夫ですから、大丈夫ですから」

鬼は腕組みして唸り込んだ後、

「いや、やつぱり駄目だ」

といったので、私は最後の手段を使った。

私はおっかないのを我慢しながら相手の顔を覗き込み、目を見つめながらこういった。

「ねえ、お願いです。私の目を見て、そう、まっすぐ見つめて、今から言うことをよく聞いてくださいね。ちよつと私の事をしゃべります。私、これでもね。高貴な生まれなんですよこの世界ではね。本当ならこの世界は思いのままな位の、でも私はそうじゃなかったのですこれ、実は私の秘密。でも、私にもちよつと特別な力があつて、それはね、目と目を合わせるとあなたを虜にできるんですよ。お話するほうが楽しいから本当は使いたくなかったけどもあなたが強情なのがいけないんです。さあ、話してください」

そうこれが、私の秘密。地霊小人から話を聞いたときにはじめて気付いた。それまでは、名前ばかりの貴族だった私をはじめて手に入れた力だった。

第五章

さて、鬼はすっかりぼうつとして語りだした。

「この料理は・・・ですね、ご主人。山のふもとのさすらい人の物なんです」

どうやら当たりのようだ、と私は思った。

「で、何故そんなものをそいつは食べるのかな？」

鬼はふらふらと答える。焰のような声もいまやふ抜けてせいぜい竈の火だ。

「奴は・・・極悪人でして・・・それ以外は・・・食べさせては駄目なんです」

その答えに、私はぞくぞくしていた。半分はそんな刑罰に処される事の恐怖で、半分はさすらい人の話に対する期待で。

「そいつは、何をしたの？」

「知らないです・・・ただ、とんでもない奴だとしか・・・古い古い魔物だとしか」

イライラして私は言った。

「役に立たないわねえ！あんたは何なのさ、まったく！」

鬼は律儀にも悪態にまで答える

「へえ・・・俺は地獄の獄卒で・・・」

そんな事を聞いたのではない！と言おうとして、ふと疑問に思った。地獄の獄卒族なんて、種族を聞いた事は無かった。

それに、この国にじゃ、いろいろな地方があるし地獄みたいな所もあるけど、本当の地獄なんて聞いた事がなかった。こいつは自分をよそ者だといっていたが、どうやら本当に、こいつもこちらのものではないようだ。

どういうことだろう？よそ者がよそ者を人の国で管理しているなんて・・・思ったよりもずっと楽しくなってきた。私の願いがかなうかもしれない、心の中でほくそえむ。

やはり、どうしてもさすらい人に会ってみなくては

「そいつは何処にいるの？」

「麓です……道から外れてちよつと行ったところですよ」

「そいつには会えないの？」

別に聞く必要もなかったが、とりあえず聞いてみる。

「はい、危ない奴でして会わせられないんです」

閉じ込められていても危ないのか？でも、私にはこの目があるしこいつも今や私の手足だもの、大丈夫、大丈夫、そう自分に言い聞かせた。

さあ、これからさすらい人のところに案内させようと思ったその時、私はふと、他に二人の山守がいたことを思い出した。今から行ったらきつと途中ではち会うだろう。それはいくらなんでもまずい何をしようにしているかがばれたらひどい目に会うだろう。私には今はこの目と青鬼しかないのだ。

暴力沙汰になったらきつとやられる。そうしたら、なにせ、鉄の炒り豆と銅のスープを罪人にご馳走してる奴らだから、ただではすまなそうだ。幸い彼らは、普段は分かれて仕事をしてるようだし今夜は当初の予定通りここで一晚過ぐすしよう。そう決めてからはやる事は少なかった。私は青鬼に、仲間が来たらいつも通り接して、怪しまれないようにして、二人と別れた後にこっそり迎えに来るようにといって、二人の帰りを寝たふりをして待った。

「えっほ、えっほ、えっほ」

暫くすると、威勢のいい掛け声とズツタンズツタンという足音のリズムが聞こえてきた。

「やあ、お帰り二人とも」

青鬼が答えたそのさを薄目を開けてみて見るとやっぱり、野牛ほどもある石炭みたいな黒鬼ともう一回り大きな燃え盛るような赤鬼が体から煙を出しながら大甕を担いで駆け上ってきた。

「いやいや、熱い。いや、重い」

「君がこなくてやはりちよつと大変だったよ」

二人は言葉の割には息も切らしておらず、にわかには信じられないような体力の持ち主である事は明白だった。

なにより、この峠を夜の間に往復してくるのだ。いくら夜が長くとも信じられない速さだった。もしうつかり鉢合わせになっていたら、そう思うと恐ろしさに思わず体が縮こまった。

「旅の方はどうしたね」

ギョロリと赤鬼の燃えるような瞳がこちらを見た。思わず目をかたく閉ざす。あまりの恐ろしさに身動きできない。その雰囲気は青鬼や黒鬼とは一味違っていた。青鬼が脅かさないように一人で私のところに来たという意味がわかるような気がした。三人どころか、赤鬼が入ってきていたら私はショックで死んでいたかもしれない。まさに、地獄の獄卒の名にふさわしい迫力だった。

「旅の方は目を覚まさなかったのかい？」

黒鬼が続ける、まだ赤鬼の視線は私の上にあるのがわかる。

「いや、一度目を覚ましたよ。その後で寝なおしたのさ。昼間はずっと歩き通しだったみたいだね。小屋の中は寝れないといったらあそこでいいというんだ。よほど疲れてたんだろう」

やっと、赤鬼の視線が消えて

「なるほど、見ればまだまだ子供のようだ疲れるのも無理はないな」

「気の毒だが小屋は使えないからな。なんたって地獄の火を使った後だ、たとえ、今晚中冷ましたってまだサウナのほうがましってものだ」

といって、黒鬼が笑おうとすると

「おいおい、どうやらあのおちびさんには私達の声は大きすぎるのを忘れたのか」

と赤鬼がとめた。

「さあさあ、二人ともまだ体から煙が出るほど熱いみたいじゃないか。早く、湖に行つて冷ましてきなよ」

と、青鬼が二人を追い払う。二人が遠くに行つたのを確認して、私は体を起こした。青鬼はすつと傍によって来て私の話を聞こうとし

ている。

「いいこと、予定通りやるのよ。私は本当に疲れたしもう寝るわ。ただ、一つ付け加えておく事があるわ、何かあった時にはすぐに私を守るのだよ」

忠実な下僕となったこの鬼はすっかりうなづいた。

第六章

やがて、遠くの地平に朝日が射す頃私は目を覚ました。どうやら、青鬼はうまくやってくれたようであった。私があたりをきよるきよる見回していると青鬼はまるで屏風のような崖の上からすごい勢いで駆け下ってきた。

私が手を振って答える間もなく、一目散にこちらに駆け寄ってくる。その様子を見て、改めて自分の目の力を実感し嬉しくなった。しかし、感激に浸るのもつかの間。いつ、他の鬼に見つかるとも限らない。今は時間が惜しいのだ。羽織っていたマントに包まると、鬼の背中に乗り命じた。

「さあ、あのさすらい人に私を会わせなさい」

鬼はまるで疾風のごとく、山道を走り、景色は飛ぶように変わっていく。高山の不思議なお花畑を走り抜け、灌木さえもなかった風景はいつのまにか藪藪しくなり、太陽がその姿を東の空いっぱいに見せる頃には裾野の大樹海に入っていた。

妖しげな植物が生い茂るそこには何故か動物の気配は無く、昨日鬼達を通ったであろう真っ黒にこげた足跡がずっと続いていった。突然、鬼が横に飛ぶ。道を外れ、谷を越え、崖沿いにひた走りちょうど五つの峰の真中のひときわ高いその麓でぴたりと止まった。

しかし、そこはどう見てもただの崖で、何かが閉じ込められていそうな牢屋はおろか洞穴も鎖さえ見当たらなかった。

「どういう事、何も無いじゃない！ 誰も見当たらない！」

イライラして、青鬼に怒鳴り散らすと横から笑い声が聞こえる。

「はっはっはっは！！ 鬼が人を連れてきやがった。俺もやっところから出られるかもな」

軽やかな声が辺りに響く、私は慌ててあたりを見回すが影も形もない「ここだ、こつちだ何処に目玉つけてやがる。キキッこつちだ」

ようやく声のする所を見つけるとちょびつとこげた草むらがしゃべ

っていた。

「あなた・・・あなたが私の探していた人？」

「知るか！そちこそ俺の待ってた奴ならいいんだがな」

「あなた、そんな草まみれでグリ－ンマンなの？」

「違う、ふざけてるのか！俺がそんなもんに見えるか！？　だいたい、おまえは俺が閉じ込められてると勘違いしてたようだ、そんなまっちょろいもんじゃない。俺は封じ込められてるのさ。おまえが見ているのは顎から上だけだ。草まみれなのは、自分じゃ草もむしれないし、鬼どもは飯を持つてくるだけで手入れするほど気が回らないからだ！」

「あなた、さすらい人なの？」

草むらは答えた

「そうだな、幾つもの世界をまたにかけて暴れまわったんだ。そういうこつたな」

ぶつきらばうな態度にむつとしながら、鬼の背中から飛び降りた。そして鬼に見張りを言いつけて草むらに近づいた。

「なんだ、なんだ、閻魔のこの小間使いがこき使われてると思つたら、こんな小娘のいうこと聞いたつてのか！真面目なだけがとりの奴がなあ」

私は力チンときてつかつかと草むらに向かうと中でも一番大きな草を乱暴につかむと根こそぎ引き抜いてやった。

すると下から真つ赤な目玉に金のぎよろついた瞳が出てきた。まったく堪えてない様子ですます腹が立った。

かきむしるように全部引っ抜いてやると相手の全貌、といったも顔だけだが、が見えた。短く生え揃った毛並み、真つ赤な顔。どう見ても猿にしか見えない。私はこんな奴に会うために来たのかと思うとなんとも情けない気分になった。それは、どうも相手も同じらしい。

「おまえ、どう見ても人の子じゃねえな。くそつたれ」

「私のほうこそ、もっとすごいのを期待していたのに例えば人狼と

か……今、あなた人の子って言った！？」

「おう、そうだ。俺をここから出せるのは人の子しかないからな！」

おまえなんかに用はないとばかり、はき捨てるように猿はいった。「何で人の子じゃないと駄目なの？ 見たところあなたは埋まってるだけでしょ。そんなに出たいのなら、私の下僕に掘らせるわよ」ただし、すっかり虜にしてからね。と心の中で笑う。

「なんだ、素人か、おまえ。俺はこの山に封じこめられてるんだ。いくら掘ったって俺の体にはたどり着かないし、この山と離れる事は無い。もしそんな事なら俺はとくに山を投げ飛ばしてここからおさらばさ……それに、いくらおまえの目がすぐくても俺にはそんなの通じはしない」

思わず後ろに後ずさりする。猿はニヤニヤこちらを眺めている。嫌な笑顔だ。こんな状態なのにちつともそんな事は気にかかっていない。私は何なのかなんてぜんぜん気にしてないくせに。からかい半分でこちらにちょっかい出そうとしているのがわかる。そのくせ嘘なんかつく気もこれっぽっちも無いみたいである。さっき言ったことも本当のようだ。さっきからしきりに私の目を見てくるし、私もずっと見つめているのに何の変化も無い。

このお猿さんは、一体何だって言うのか。確かに鬼達が他の生き物にこいつを会わせないようにしていたのも解ろうという不気味さで、それは、ファンタージエン中のどんな夜の生き物よりも不気味で、まるで幸運の竜のように堂々としていた。

第七章

「どうしたね？ 小娘。怖くなったのか」

猿は歯をむき出してしわくちやの顔をさらにクシャクシャにし、一層ものすごい笑みを浮かべてこちらを見ている。ふいに、キツと鋭い視線でこちらをにらみつけた。

すると、私の髪留めがはじけ、結びあげた髪がぱつさりと垂れる。私はぞつとしてその場にしゃがみ込んでしまった。

猿はそんな私をよそに顔にかかった土を鼻息で吹き飛ばし今度は一転へらへらとした表情である。眉間のしわはだらしなく緩みその金色の瞳だけが炯々と油断無くあたりを見回していた。

「まあ、いいか。ここ二千年じゃ話のわからん鬼以外の生き物は初めてここに来る。どうやったか知らんがたいしたもんだ。さすがにこんな生活もうんざりしてたところだ。さあ、何か話せ。そのために来たんだろう？」

猿はいったが、私はそんな気分ではなかった。これは化け物、そう化け物！！ まさにユグラムールと同じくらい恐ろしい怪物だわ。

こんな化け物とは一刻も早く別れたかったが、すっかり体から力が抜けて逃げる事さえかなわなかった。

「わ、私は、あなたに興味があっただけ。どうしてこんな所に留まってるのか？ とか、どんな奴か？ とか」

震える声でそれだけ絞りだすと、もう声はでなかった。

「なんだ、自分のために来たのか。まあ、大抵は人に会うつてのはそういうことだろうな。特に呼ばれたわけじゃなければ一方的なものかもしれん。俺が聞きたかったのはもっと楽しい話なんだがな・

つまらなそうに、言っただけ

「しかし、なにせ、旅の方は緊張してるようだし、まずは俺の話からしてやろう。俺はおまえの言うとおりさすらい人だよ。自由なも

のだったさ。俺には父も母も無い天地の気を受けて世界と一緒に生まれたのさ！その後、暫くは生まれたところで、さすらい人でも生れ落ちる場所はいからな、王様暮らしをしていたがそれにも飽きてな、あちこちでかけてみる事にしたんだ。そう！ ちょうど、今のおまえみたいなもんさ。俺はたくさんさんの事を学んだ。それからだな、自分のすんでるところ以外の世界があることに気付いたのは、俺が学んだ事を使って、あっちこっちで、珍しいものを手に入れ好き放題した頃さ！」

猿はさも愉快そうに言う。

「でも、やはり、独り善がりでは段々つまらなくなってきた。俺は、肩書きがほくてな、天界の役所に勤めてる事にしたんだ。まあ、つまらない仕事だったんだがな。」

目をくりくり回しながら早口でしゃべる猿はとても楽しそうな様子だった。

「何をしていたと思う？、わかるか？この俺にふさわしくない仕事だった！ 答えてみるよ」

さあさあ、と迫る。どうやら本当に退屈していたらしく、しゃべり始めて楽しくて堪らないようだ。私も段々と望みがかった事を思い出して嬉しくなってきた。

「何、何をしていたの？」

「いいから、答えてみるよ！ 正解はその後だ」

「うーん、あなたお猿さんみたいで身軽そうだから・・・庭師かしら？」

「はずれだな、大体なんで身軽だと庭師なんだ？近い事もしたことがあるが最初は違う」

「じゃあ、何？」

「ちよつと恥ずかしそうに猿はいった。

「馬小屋の番人さ。誰にも言うんじゃないぞ！その後は桃園の管理人だ。でもさ、木っ端役人だろそれ、飯にも元帝王のやる仕事ではないさ。頭に來たから桃を盗んでやめてやった。」

「それで、それでどうなったの？」

「それで、怒った政府の奴らと戦争さ！幸い俺はそっちのほうは自信があつてな散々追い払って逆に“天に斉しい大聖人”って称号をもらった。だってそうだろ？俺は天地から直接生まれたようなものだもの。それで元王様だ。これくらいの役職じゃなきゃつりあわない」

私はうんうんとしきりにうなずいてしまった。自分だって己に相應しい物は欲しいもの。ほんとに欲しいのは名前じゃなくて別のものだけだ。

「その後、暫くは戦争の繰り返し。そしてある日、俺はついに捕まっちゃった」

「で、ここにいろの？」

「いや、その時は平気だった。何せ俺を捕まえておくことも殺す事も連中にはできないんだから、また、お宝を失敬して逃げ出してきたのさ」

すっかり話を聞く事に夢中になっていた私を見て、猿の語りも熱がはいってくる。

「じゃあ、何でここにいろの？」

「それが、本題だ。俺はさまよう者だからな、人界、天界、地獄ときてここ幻界の話を聞いた。行つてみたくなるさ。ついでにちよろつと暴れてやろうと思つたんだ。そこには不思議な道具がたくさんあつて、中でも彷徨山、卵殻堂の文筆老爺の緋絹経と螺旋宮象牙塔の主でこの国を治める金睛公主の交蛇願来輪の二つはどんな願いもかなえるらしいって話を聞いたのさ。それでこの世界に飛び込んだんだがそれがいけなかった」

耳慣れない言葉に私は思わず聞き返した。

「幻界って、その物言いだとかこのファンタジーエンの事でしょう？私この世界のものだけど、ブンピツロウヤもキンセイコウシュも聞いた事なんか無いけど？」

「俺に聞いてもらはん。来てすぐに捕まっちゃったんだから。ただ、

この言葉ではないのかも知れんな。俺が聞いたのは外^{そと}つ国^{くに}での話でな、そこでは地域によって言葉が違うのだから　ただ、この国の者なら誰もが知っている老人と少女だそうだが？　」
そこまで言われてはつと気付いた、なるほどあの二人の事が外^{そと}つ国^{くに}にも伝わっていたのか、
おまけに少し話が変わってるようだ。

第八章

「なあ、心当たりがあるかい？ その二人が何処にいるか？とかさ」
猿が何食わぬ顔で聞いてくる。こいつはその宝をあきらめる気なん
か全然ないようだ。けれども、それを手に入れるどころか二人に会
う事も難しいだろう。

なにせ、この私でさえも未だその二人には会えていないのだ。え
らばれた、人の子で無い限りは思いどりには行かないだろ。

だが、それを手に入れるのは恐らく無理だろうと言う事は黙つて
おいた。何でもできますって顔した奴にあんたにも出来ないことが
あるって言つてやる事は別に面白くも何とも無い。自分でそのこと
に気づいて苦しむのがいいのだ。

「でも、あなた、ここから動けないんでしょう？」

そんな事聞いても意味ないじゃない、といわんばかりに顔にかかる
前髪を払いのけながら私は言った。

すると猿は苦々しく

「人の子が来て山の何処かにある札さえ剥がしてくれれば、俺は今
すぐにでもこの山を投げ飛ばせるんだ。その前にいろいろ知つてお
いても悪くはあるまい」

「それで、私の事、人の子かどうか聞いたのか。でも、なんで人の
子なの？」

「詳しい事は知らないが、俺をここに閉じ込めた奴が言っていたの
さ。何か特別なんだろここでは？」

「まあそうね、彼らは特別よ。憎い位にね。あなたの言つてた宝物
の片方、願い事を何でも叶える二匹の蛇の御印、こっちはアウリ
ンっていうけれど、それを使えるのも人の子だもの」

でも同時に哀れだわ。末路は大抵決まっているもの。あれが宝？
あんな物自分で使うなんてよっぽどの馬鹿！ 確かに不思議な力は
あるし、持っていれば叶わないことは無い。

だけでも、それは自分で努力するから得られる結果には優りはしない。

そうあれは、畏だわ！この世界という生き物がつけた花のようなものよ。

「あなた、そんなに宝物が欲しいの？ 何か願い事があるの？」

なんだか腹が立ってきてしょうがないが、この猿ならきつとくだらない答えは言わないだろうと期待して聞いた。

「あるさ！」

私は冷めた視線を送ったが猿はかまわず話しつづける

「まずは、ここから出たいって事だな！！」

おどけるように言った

「それじゃ、今、手に入れなければ意味ないじゃない！ 馬鹿にしてるのあなた？」

あきれて私は言う。ふつと猿の雰囲気が変わり、鋭い声で言い放った。

「馬鹿にしていると！ 馬鹿にしているのはお前のほうだ！！」

俺がそんなものに頼るとでも思っているのか？ ただ珍しいものがあるから手に入れるまで！！ 己の願いなど自分で叶えるものだ。

今までそうして手に入らないものは無かった！その俺がそんなものに頼るというのか！！

威厳に満ちた態度で猿は語った。その姿は首からしたが地面に埋まっていたが素晴らしく堂々としてこれを笑えるものはいないのではないかという態度だった。私はこれがこの猿の本性である気がした。こういうものになりたいと本気で感じてしまった。

そうだ、私には私のやり方と野望がある。なんと言われようと望みをかなえるのだ。旅に出て心底良かったと思った瞬間だった。決心がついた。猿はまだ怒気をはらみ、その剣幕はまたも私を圧倒していたが、今度のそれは同じ恐れではなかった。

「次に同じような事を言ったら、貴様の首は無いと思え」

それくらい訳は無いぞ、と金の瞳がこちらを睨み付けている。私は

慌てて謝った。

「ごめんなさい・・・失礼な事を言つて。私なんて言つていいの・・・」

その時だ、見張りについていた鬼が大きな声を出した。

「ご主人、見つかりました。黒鬼です。どうしましょう!?」

私には、見えなかったが、こいつの目は信じていいだろ何せこいつは山守だ。山の異変を見つけるのが仕事なのだ。

「どうしましょう! 黒鬼はこっちに来るの? 赤鬼はいるの?」

事態は逼迫していた。これで鬼二対に襲われたら逃げ様が無い。早く逃げなければ。気があせればあせるほどに何をしていたかわからなくなる。さつき自分の力で生きていこうと思つたところなのに・・・

「赤鬼は見当たりません・・・黒鬼だけです。こっちに向かつています」

そういう終えたときにはもう黒鬼の立てる地響きがすぐ近くに聞こえていた。

「足止めして! 早く!!」

言うが早いか青鬼は手近な木を引っこ抜き、音のするほうへと飛び込んでいった。めきめきと木の折れる音がして壮絶な咆哮がこだます。

あたりは騒然となった。谷間の森の狭間に時折恐ろしげな角が覗く。

「おい、小娘。もう行くのか?」

猿が残念そうに尋ねた。

「ええ、もう行かないといけないみたい。この騒ぎじゃ赤鬼も来るかも知れないし、あいつが、かつとも限らないもの」

こちらに残念な気持ちだった。

「じゃあ、最後に頼みがある」

「何?」

「何か食べ物と飲み物をくれ。金気の味がしないのを」

それもそうかと思った。まだ旅の食料はあと杏の干したのが四つ、水も湖で汲んだものがたくさんとはいえないが一口くらい余分にはある。それならこの猿に少しぐらいやっても撥は当たらないように思えた。

「いいわよ、水と干し杏しかないけれど」

「それでいいよ。こんな状態だ、すまないが食べさせてくれないか」

第九章

私は恐る恐る猿に近づいた。

「さあ、まずは杏をもらおうか」

口をあめぐりあけて待つてここに入れると催促する。とりあえず、一つ入れてみた。すると、猿はバリバリと音を立て種ごと食ってしまった。そしてまた口を開きこういった。

「もつとだ」

ここでごねられるとほんとに逃げ送れる。仕方ないのもう一つ放り込むとまたバリバリご君とあつという間に飲み込んだ。

「まだくれ」

さすがに、半分やってしまふのは惜しい気がした。次の町までは小人の話では三日近くかかる、引き返すにはこの山は危険だった。これでも、無理はしてる。

「もう、あげられないわ。私はこれからも旅があるの」

というと、意外におとなしく

「そうか、ならいい。じゃあ、今度は水をくれ」

そしてまた口をあけた。その口に水を流し込んでやる。水は砂に吸い込まれるようにのどの奥に消えていった。

「ああ、うまい」

感慨深げに猿はいった。

「さあ、もう行くわよ。ほんとに急がないと」

ドスンとすごい音がして、ギャ という叫び声が響く。森の影から黒い頭が覗いた。あれは黒鬼だ。ゆつくりとこちらに近づいてくる。

「待った、三本だ。行く前に三本俺の毛を抜け。そして、俺の前に見せる」

「一体何？ほんとにもう時間が無いの」

「言いから早くしろ」

猿のえらい剣幕におされて、サルの顎の毛に手をかけるとえいと引っこ抜きそれを顔のまん前に突き出してやった。すると猿はぷっと強く息を吹きかけた。見る見る三本の毛は三匹の小猿に変わっていく。

「餞別だ。連れて行け。たぶん少しぐらいしか持たないが俺の分身みたいなものだ。今はこれが精一杯だな。三匹なのはご馳走になったお礼だから三口分だ。水の分だけは特別製だから大事にしろ。後は使い捨ててかまわん」

三匹の猿は私のマントを駆け上り肩にしがみついた。

「ありがとう。こんな、プレゼントを」

「なに礼には及ばん。暇もつぶせた。まともなものも喰えた。それより、おまえはここからどうやって帰るのだ？」

私はやっと気が付いた。来た時は青鬼の背中に乗って来たから良かったが、一人で山道まで出るのとはとても無理だ。眼前にはきつく傾斜した薄暗い樹海が裾野まで広がり後ろは断崖絶壁が立ちはだかる。まだ遠くに見えていた黒い影がみるみる大きくなって迫るのが見える。とにかくここにいたら危ない。来た道からは鬼が来る。

もうお日様もだいぶ高くなってしまった。私は意を決して樹海に入ることにした。とりあえず身を隠せて山と反対のほうに行くにはもうそこしかない。

「さよなら！」

一声かけると、暗い森の中へと駆け出した。

第十章

ともかく、夜になる前になるべく山から遠ざからないといけない。木の枝の間をかけながら考える。後ろからは木々のゆさゆさと揺れる音が聞こえる。まだだ、まだ距離はある。早く遠くに行かなくては。

しかし、そこは道なんて物の無い世界だ。一箇所も平らなところはなくごつごつした岩や根っこもほとんどがこけに覆われていてほんとの形がわからない。ただ大木の間起伏が続く。何度も何度も落とし穴のような窪みに足をとられながら進む。

「どこだ！どこだあ！」

空気がびりびり震えて、木の葉がバサバサ鳴る。私は驚いて足を踏み誤って小さな小屋ほどはあるつかという根っこから転がり落ちた。幸い地面はふかふかのこけで覆われていたので目が回っただけで済んだ。

立ち上がって再び走り出そうとしたその時、

「そこか、今隠れたな！ 逃げるなよ、見つけてやる！」

と後ろのほうから声がする。私はとつさに根っこに身を寄せた。あたりは、似たような木がたくさんある。息を潜めてやり過ごそう。

ぎゅっとマントを握り締めて震える体を抑えていると、

「確かこの木あたりだ。」

すぐ後ろの木で轟々と声が聞こえる。

「この根っこか？・・はずれだ」

「隣か！？ ここにもいない。もうひとつ隣かな？」

「・・・ここもない。向こうの木はだな」

鬼が歩きたびに地面が揺れる

「そこか！！」

体がびくつと縮まる。

「いや、いない」

すぐ裏側の根っこだ。次はいよいよ私の根っこだ

「ここかあ！」

鬼の毛むくじゃらな手がぬつと突き出されたその時、私の肩から一匹の猿がトンボを切つて飛び降りた。みるみるうちにその姿は私そっくりの長い黒髪のマントをつけた女の子に変わり、鬼の手めがけて駆け上った。鬼は慌てて手をばたばたさせながら贗者の私を捕まえようと追いかける。

「さて、さてえ。このすばしっこい奴だ！！ 捕まえて頭からかじつてやる！」

ひらりひらりとマントをなびかせてましろの如く、まあもともとが猿なのだからそのままだが、鬼をかわす贗者は鬼の鼻の頭を蹴っ飛ばした。

「ぐわ、この小娘め！」

鬼は湯気を立てて怒つてすっかり他の事が目に入っていないようだ。贗者は今度は鬼の脛を蹴飛ばすと、馬鹿にするような流し目で山を目指してかけていった。鬼は怒り心頭、目をららんと光らせて鼻を抑えながら後を追いかけていった。

「さてえ、こんちくしょう！！・・・待ちやがれえ・・・」

すごい罵倒と足音を残し鬼はあつという間に遠ざかっていった。すっかり音が聞こえなくなつてから根っここの間から這い出すと、水を一口、口に含み息を整えた。

「何とか助かったみたいね」

空を見上げると太陽はもう山の頂きに手をかけかけていた。猿が服を引っ張りしきりに、ある方向を指す。

「こつちに何かあるの？」

「キキ、キキキ！」

どうもそつちに行けと言う事らしい。どちらにしろ、長居はできない。

さっきの事もあるし、ただ闇雲に山の反対に走るより猿の言う事を聞いたほうがいいかもしれない。

さあ、先を急ごう。日が暮れる前に。いや、それはもう無理だろう。しかし、早くここを抜けなくては。重い足にハッパをかけて再び走り出した。

そして、その途中途中で猿が示すほうに向かい走りつづけた。やがて、山の陰が伸び始め夜の足音が聞こえる頃には、足は痛み、何度も転んだせいで髪は苔まみれ、顔は所々濃い緑や茶色のしみがつき服もどろどろだった。

猿は相変わらず私の肩でキィキィ鳴いている。その方向にもう一足出したとき、ずっと走りずくめで来てふらふらの私の前が突然開けた。どつさりと倒れこむ私の前には一つの道が広がっていた。

「み、みち？・・・」

横で猿がわめいている。

行かなくちゃ・・・だけど体が動かない。ふっと意識が遠のいていった。

「おゝい、おゝい、大丈夫ですか？ 旅の方？」

目を覚ますとそこには赤鬼がいた。心臓が跳ね上がった。

「きゃああ！」

思わず悲鳴が口を突いた。

「ん？ なんか、ありましたか？」

心配しているようにこちらを見ている。どうも様子が違う。私が何をしたのかまだ知らないようだ。

「それより、どうかしたんですか？ そんな格好で。ボロボロじゃないですか」

周りを見回す。小猿どもがいない。よかった、きっと見つかったら危うく殺されていたかもしれない。だって、あいつらは小柄だけでも顔があの猿そっくりなもの。

しかし、さてどう説明したものか心配そうにこちらを見つめる鬼の顔ちらちら見ながら考える。この状態なら私の目も使えるだろうけど、この赤鬼は、黒鬼青鬼とは一味違うようだ。体も一回り大き

いし中々隙も見当たらない。

もしかしたら、目の事をわかつているみたいな感じだ。そうでないにしても、あの夜も、私のことを警戒していたみたいだし。ここは無力を装ったほうが安全かもしれない。

「はい、実は私が山を降りる時に青鬼さんが途中まで送ってくれたんですが、その道ではったり黒鬼さんと会って、仕事の話で納得行かないとか何とか・それで二人が喧嘩をはじめてしまったんです。二人は取っ組み合いながら森に入っていつて夢中でしがみついていたけれどその途中で私は青鬼さんの背から投げ出されて命からがら森の中を走ってきたんです」

弱々しくうつむきながら言うと、鬼はじろりと私をにらんで声をかたくしながら言った。

「本当ですか？ あいつらがそんな事をするとは思えないんですが

」

やはり、私を胡散臭く思っているようだ

「本当です。そうでもなければ、ほらこんなに苔まみれにはならなideでしょう。この道は石畳で苔なんか生えてないですもの！」

私は泣きながら訴えてさらに続けた

「早く止めに行かないと！！ まだ喧嘩をしてるかもしれないし、もし終わっているとして怪我の手当ても必要です。幸い私は走りつかれただけですから早くさがしてあげてください。さあ、早く早くともかく、もうこれ以上鬼のそばにいるのは嫌だったので早く何処かにいってほしかった。出発したとして、ついてこられたら猿達を呼び戻せもしない。あまり、弱々しくても心配して残るかもしれないし、元氣すぎても怪しまれるので横になったまま何とか起きてるような感じでいう。

鬼は暫く考えた後すつくと立ち上がり。

「そういうことなら確かめて来なくて、ここで待っているんですよ」

といって風のように走り去った。誰が待っているものかと内心毒づ

き、姿が完全に見えなくなったのを確認して立ち上がる。すると、二匹の小猿が駆け寄ってきた。

「さあ、お前達。行くとしようか」

今度は、奴らは山に向かったのだしそんなにあせる必要も無いだろう。走らずとも大丈夫だろう。道もはつきりわかっている。安心して歩き出した。

あたりはすっかり真っ暗で足元はあまり見えないが、東の空にちよこつと月の端が見えている。もう暫くすれば、月影があたりを照らしてくれるだろう。水を一口含みながらとぼとぼと道を進む。歩きながらすっかり汚れた服や髪に改めて気がつき次の町にいたらどこかお湯を使える所があるだろうか？などとのんきな事を考えながら先に進む。

なんとなくひとごちついた気分だ。むろん、油断はできないだろうが穏かな明かりと静けさがゆつたりとした空気を作っている。今こうしている限りではこの山もただ馬鹿みたいに高いだけのようにも思えてくる。小猿たちもなんだか楽しそうだ。やがて、月が山の頂きにかかる頃、歩きつかれたので少し腰をおろした。

最終章

「キキ！」

突然、猿が騒ぎ出した。静かに辺りに集中してみると山のほうから轟々と空気の震えるのがわかる。まさか！！

「待て！小娘よくも騙してくれたな！！」

たしかに鬼の声が聞こえた。急いで逃げなければ！ 私はすぐに立ち上がりまた走り出すのだった。

「こんな事なら、もっと早く抜けられるように考えたのに！！」後悔していた、自分が甘かったと。声はみるみる近づいてくる。

失敗した。それも二つだ。よく考えれば、あそこで鬼が合流するよう仕向けたのも失敗だった。二人は手に金棒を振り回しながら迫ってきた。

「まて！ 娘、まてえ！！」

「今すぐ、その頭を叩き割ってやるぞ！！」

足音が響き、金棒のブーンブーンという、うねりが聞こえる。

「嘘つきめ！ その舌引っこ抜いてくれるわ！！」

ガシャーンとすぐ後ろに金棒がたたきつけられた。石畳の階段が碎け破片が飛び散り、石飛礫が襲い掛かる。それでも走る。走りながら私は肩の猿に言う。

「お願いなんとかして！！」

キーと一声鳴いて返事をする一匹が肩から飛び降りる。その猿が地面に降りるや否や体をぶるつと震わせ大きな川になって鬼との間を切り離れた。

「なんだこんなもの！」

黒鬼が飛び込んだが激流に飲まれ流されてしまった。

すると赤鬼は、川に口をつけてごくごくと飲みだした。その間に私は逃げに逃げた。まただいぶ走って、後ろを向くとまだ川の流れが見える。まだ走った。

そして、また振り向くと、今度はもう川は見えず水の音も聞こえない。変わりに鬼の声が聞こえた。

「まてえ〜！逃げるな！！」

またどんどん距離は詰まってゆく。すごいスピードだ。生きた心地もしない。鬼のものすごい叫び声が辺りに響いている。走って走って走って逃げた。もう月は見えず、あたりは真の闇が支配していた。真っ暗いなか怒れる塊が後ろから迫ってくる。熱気が伝わってくる。くだりの石段は想像以上に走りにくく、蹴躓きそうになりながら転がるように下っていく。

ああ、どうしよう、どんどん追いつかれている。声はどんどん大きくなる。足音は荒々しく近づいてくる。ダン！ 土地を蹴る音が聞こえ、二本の大きな腕が左右から私を捕まえようとしたその時！不意に石段が終わり私は前方にもんどりうって転げた。さっきまで私がいた辺りには燃えるように赤い二本の腕ががちりと組み合わされていた。

だがそれ以上、鬼は追っては来なかった。ついに山を抜けたのだ！ なんとという感動だろう！！生きている実感が嬉しい。同時に滝のような汗が流れ落ち体がへなへなと崩れ落ちていく。

「ははははは」

笑いが止まらなかった。

その時、ピュ と甲高い音がして私の体が宙に浮いた。同時にドカンとすさまじい音がしてものすごい爆発が起こった。

もう駄目だ・・・

今度こそ死んだそう思った。

その時だった。

「うん、まあ合格だな。これからおまえにはいろいろ教えてやる」横で声がする。ぐんぐん地面が遠ざかり、さっきいた場所に金棒が突き刺さっているのが見える。山の境界線には赤鬼が悔しそうに地

団太踏んでいる姿がある。

「あなたが、水の分ね？」

「そう特別製だぜ！」

私は今、雲に乗っているようだった。やがて、五つ峰の山の向こうに沈んだはずの月が見えてきた。

「いろいろってあんた達が使った不思議な術も？」

「ああ、それもだ！　ところでおまえの名前は？」

「私はサイーデ　この世界の始まりと共に生まれたものよ」

その頃、囚われの猿は

「あいつはうまくやったかな？　これであいつがこの世界に人の子を呼べるような騒ぎを起こしてくれれば思いどおりなんだが　まあ、今は眠るとするか」

ひっそりと眠りにつくのであった。

これは昔々の話、幼心の君の姉がまだ闇の女王と呼ばれる前の話、彼女が力をつけるきっかけの話だ。そして、今や彼女は自分の力で未来を切り開いている。良いも悪いも無くこれからも歩みつつけるだろう。だがそれは別のお話。

最終章（後書き）

鬼の守る山はこれにて完結です。ここまで、お付き合いくださいまして有難うございます。

実は、昔書いたものを見直した作品で、かなり、書きたい様に書き散らした感があり、ネバーエンディングストーリーを読んだ事が無いとわかりずらい部分も多々あったと思います。

話の運びなども、強引に進めてしまったりしていますが、アイデアありきではじめたツケでしょうか？

ただ、ネバーエンディングストーリーが東洋風になっていたのは、意外だったのでは？と思っています。

どうしても、サイーデの昔の話を書きたかったのと中国ネタを入れたかったのです・・・

ともかく、少しでも楽しんでいただけたのなら、幸いです。宜しければ、感想など送っていただけると嬉しいです。

また、ただいま完全オリジナルで二本連載していますので、そちらの方も宜しければ試してみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3826d/>

鬼の守る山

2010年10月9日11時48分発行